



信濃川洪水図（新潟県立近代美術館・万代島美術館 所蔵）より、
松本楓湖筆「母子川流れ（上図）」、川崎千虎筆「倒壊くず家（下図）」

「明治期に四五年間、新潟平野では洪水がほぼ毎年起こっている」と言うが、明治期に限ったことではない。それ以前から、新潟平野は毎年洪水に悩まされてきた。しかも、梅雨や台風にとどまらず、春の雪どけ出水によっても洪水氾濫に見舞われた。

近世中期まで、信濃川と阿賀野川は、河口近くで合流していた。信州から流れ下る千曲川は、信濃川と名を変えて新潟平野を北上し、日本海に注ぐ。一方、会津・只見から流下する阿賀川は、阿賀野川となって新潟平野の北部を流れ、西に変流して信濃川と最下流部で合流する。春の雪どけは、千曲川の方が早い。この融雪出水が終わりに近づく頃、阿賀川の融雪出水が新潟平野にやってくる。つまり、長い雪どけ洪水期間が蒲原（かんばら）一帯を悩ましてきた。

この悩みが緩むのは、近世中期、享保年間（1716～1735年）からである。この頃、阿賀野川に松ヶ崎放水路ができた。施工当初は、阿賀野川の放水路としてではなく、阿賀野川に流入する加治川を、本川から分離するための水路として、砂丘を切って造った小河川であった。その水路が通水した翌年、阿賀野川の雪代洪水が水路に流れ込んで、川幅を広げ、ほぼ今日の阿賀野川河口の状態になった。したがって、結果的には阿賀野川の放水路を開削したことになり、これが松ヶ崎放水路と呼ばれるもので、信濃川と阿賀川が別々の河川になった。この放水路開削の後、新潟平野の開発が大いに進展した。

悩みが緩んだとはいっても、洪水から解放されたわけではない。新潟平野の地形は、「洪水と人」の関係を容易に断ち切らせない。

信濃川の洪水が、ひとたび破堤を起こせば、新潟平野は泥の海となった。そうした惨状を伝える記録も多く、「信濃川洪水図」にみるような絵巻も残っている。とりわけ、近世後期の宝暦7年（1757年）と明治29年（1896年）は惨憺たる様相を呈した。兩年とも同じ破堤地点の名をとって「横田切れ」と呼ばれ、新潟平野の大部分が水没した悲惨な様子や洪

水後の苦難の生活などを今に伝えている。

水害の時だけでなく、新潟平野の生活は厳しかった。「白根郷史」によれば、灌水がひどくて苗代の田さえ容易に得られない。やっと確保した「ヒヨロ」苗を苗舟に積み、縄で腰にしばり、舟を引きながら苗を植えた。「カンジキ」や「ヤチゲタ」をはいて田に入り、「ノッシ、ノッシ」と注意して歩まねば転倒した。風の強い日は舟で刈りとり、風の静かな日は「カンジキ」を足につけて作業し、イネは舟で運んだ。収穫はその年の灌水深で決まるので、「3年に1作、3年に2作が期待できるほどで」「田植えあれど稲刈りなし」の言葉があった。

新潟平野には、大小5つの放水路が造られた。阿賀野川系統の松ヶ崎放水路と加治川放水路、信濃川系統の大河津分水と早通川放水路・矢川放水路である。これらの放水路によって、新潟平野の整備をすすめる基礎ができあがった。近世後期に早通川、矢川の通水があり、加治川放水路と大河津分水は、それぞれ明治29年（1869年）、大正11年（1922年）の通水である。近世中期以降、次々に信濃川水系に属した支川が分離し、最後に大河津の分離をはたした。

大河津分水の構想は享保年間に遡る。その後120年を経て、明治2年（1869年）に実施にこぎつけた。しかし、翌年中止となり、その後も賛否両論が続き、時には流血の惨事にもなった。明治29年（1896年）大水害の後、大河津分水の再登場の声は高まり、明治40年（1907年）に実施への道が政府決定され、同42（1909年）年に起工した。大河津分水通水後、昭和初頭から、ポンプ排水を主軸として、灌水田から湿田へ進み、さらに用排水の分離を主軸として湿田から乾田へとめざましい変貌をとげ、今日の見事な水田地帯が形成されることとなる。その基点は大河津分水であり、これら放水路群の構想を生みだした元祖は松ヶ崎放水路である。

あまりに見事な変貌なので、つい前身の「水害多発地帯」の記憶を忘れてしまいがちかもしれない。

宮村 忠（関東学院大学 名誉教授）